

# 庄内藩の戊辰戦争

この解説は、当館第179回企画展「戊辰戦争を戦った酒田町兵と農兵」を元としています。

(平成29年3月 改定)

※以下、すべて旧暦表記

## ■戊辰戦争が起きた背景

戊辰戦争が始まる以前より、すでに徳川政権の力は弱体化しており、民衆の一揆や外国からの圧力に弱腰になっていた。逆に、朝廷と公家らが発言力を持つようになった。

孝明天皇（明治天皇の父）が外国勢力を嫌う「攘夷派」だった事もあり、アメリカとの不平等条約を結んだ幕府との関係が悪化してしまう。しかし、攘夷派であっても倒幕の意思は無く、朝廷と幕府の力を合わせ、外国勢力を排除しようとする「公武合体派」であった。徐々に孝明天皇のそうした考えが倒幕派の公家・諸大名の障害になり、公家らは孝明天皇の意見を無視した動きをとるようになる。

幕府と朝廷を結ぶ点であった孝明天皇は、若くして崩御。死に関しては暗殺説も流布された。次代として**明治天皇**が即位したが、15歳という若さの為に政治能力は無く、公家らに裏から操作される形となる。

朝廷側の圧力が高まる中で、以後も勢力を維持したい徳川政権は、**大政奉還**を行い、安定した地位と発言力を保とうとする（政治力が未熟な朝廷がいきなり政権を持っても、幕府に頼るしかなく、結果幕府側は重要なポストを維持出来る）。朝廷側からは大政奉還の直後に**王政復古の号令**が出され、新政府からは徳川勢力を追放する方針が固まる。しかし徳川慶喜がこれに反発し、押し切られる形で重要ポストへの就任を認めさせる。

これに反発した雄藩の薩摩藩・長州藩らが、幕府側を挑発して暴動・鳥羽伏見の戦いを起こし、戊辰戦争へと突入するのである。

## ■徳川家と庄内藩



庄内藩酒井家の祖である酒井忠次は、徳川四天王の一人であり、以後代々**佐幕派**（幕府を補佐する意味）として徳川家に使えてきた。元治元年には庄内藩は江戸城溜間詰格（将軍に拝謁する順番の一種で、溜間は格式が高い）となり、譜代大名の中でもとりわけ有力な藩として存在した。こうした背景から、庄内藩は幕府側の有力藩として位置づけられており、維新時はこれが新政府軍より仇とされるひとつの理由となった。

大政奉還が行われ、徳川時代が終わりを迎えると、日本各地の藩は朝廷側か幕府側かで二分する事となる。庄内藩にも徳川慶喜の追討命令が政府軍より出されたが、先に記した主従関係の恩義から、徳川家に矢を向ける事を拒絶し、追討命令免除の嘆願をしている。しかしその嘆願は政府に取り上げられる事は無く、庄内藩は追討の対象となるのである。

庄内藩が朝廷にはむかった事は無く、政府軍から「賊」「朝敵」とされる理由は無い。しかし、戦争の勢いが高まり政府軍の東北への侵攻が進む中で、庄内藩も民と郷土を守る為、そして名誉回復の為に戦いに向かう事になる。

写真：徳川慶喜（国立国会図書館より）

## 豆知識■金の流出

日本が鎖国を解き、外国商人がさかんに日本へやってくるようになると、金の流出が激増するようになる。商人たちは日本で安く金を手に入れ、帰国後に小判を換金し大金を得る。これは日本と外国では金の価値が3倍も違っていた為である。新しい貨幣の発行など、対処策を出した日本だが、アメリカの強硬な姿勢により聞き入れられなかった。

これに危機感を抱いた幕府は、金の純度を下げた小判を発行して流出を防いだが、国内ではインフレが起こり、人々を苦しめる事となる。

## 豆知識■この頃流行した狂歌

「武具馬具師 アメリカ様と そっと言い」

…動乱の世になり、需要が急激に増した事から

「泰平の 眠りを覚ます 上喜撰 たつた四杯で 夜も眠れず」

…蒸気船4隻（杯とも呼んだ）と上喜撰（喜撰はお茶の銘柄、その上物）4杯をかけた

## ■薩摩藩邸焼き討ち事件

戊辰戦争第一の戦闘「鳥羽・伏見の戦い」が起きる原因でもある、**薩摩藩邸焼き討ち事件**は、庄内藩が主導して行ったものである。当時、庄内藩は江戸市中取締役という、現代の警察の役割を担当していた。この中には、幕府から預かった**新徴組**、約160名も含まれていた。

徳川慶喜が大政奉還を行ったため倒幕運動の出鼻をくじかれた薩摩藩は、戦争のきっかけを作ろうと挑発行為を行う。10月頃より薩摩藩の援助を受けた浪人たちは、江戸に繰り出しては強盗や放火を行うようになった。次第に過激化し、12月23日には江戸城二の丸が炎上、同日に三田にあった庄内藩の詰所にも発砲を行った（三田蕎麦屋事件と言われる）。この事件で庄内藩に一名犠牲者が出た。襲撃を行った浪人を捕まえると、一連の狼藉が薩摩藩のしわざと分かった。これによって幕府論が薩摩藩征伐の方向へ向う。

25日、三田薩摩藩邸の周囲を、新徴組を含む約1000人の庄内藩兵・松山藩兵と、上ノ山藩兵や幕府陸軍など約1000人が取り囲んだ。結果、焼き討ちは成功し薩摩藩邸は接收された。薩摩藩側の死者は50名にも上ったが、数十人の薩摩藩士は脱出し、品川沖から船で逃亡した。薩摩藩の行いに憤慨した会津藩・桑名藩は一気に討薩に傾き、鳥羽・伏見の戦いへと向う事になる。



これら一連の流れは、倒幕のきっかけを作ろうとする薩摩藩士・西郷隆盛が計画した事で、庄内藩を含む幕府側は、まんまと薩摩の挑発に乗ってしまった訳である。

画像：薩摩藩邸焼討ち事件絵図（松山文化伝承館蔵）

## ■庄内藩の装備

他国船が目撃されるようになった庄内沿岸でも、砲台の構築や兵の訓練が行われていた。また、庄内藩は江戸に作られた台場の警備も命じられ、陣屋を設けて警備にあたった。

戊辰戦争開戦後、庄内藩兵の装備は本間家の援助があり、幕府側の藩の中でも近代装備の面で充実していた。本間家の本間光美・本間耕曹は、武器商人スネル兄弟らと独自ルートを持ち、庄内藩へ近代武器を送っていたのである。なお、多くの藩が使用した輸入武器は、アメリカ南北戦争で使われたものである。

黒船来航以後は、欧米軍隊を模倣した軽装備の軍が各地で編成される。新政府軍の薩摩藩・肥前藩は近代化を推し進めた事で圧倒的な武力を誇り、長岡藩の河井継之助は日本に3台しかなかったガトリング砲を所持し使用した事で有名である。しかし、近代化に出遅れた藩や町民達の中には、戦国時代のような甲冑や武器を装備するものもいた。

開戦後は酒田町人の中でも戦争に備え訓練するものが出始める。砲術訓練には大工町の町民ら80名が参加し、三十六人衆の鑑屋幸太郎・二木重之助らも参加している。なお、三十六人衆に属する豪商たちは、自ら武器の調達を行っている。町兵隊が組織された際、「黄金隊」と呼ばれるゆえんである。また、たびたび町民らの報告で酒田町に敵襲が伝わっており、吹浦口に新政府軍が到来した際は、漁夫が早船で知らせている。

## ■庄内藩 幕末期の藩主

**酒井忠発**（ただあき）（1812-1876） 1 1代藩主

文久元年に弟忠寛（ただとも）に家督を譲り隠居するが、翌年急死した為に10歳だった四男忠篤に家督相続させ、以後政治に関与する。公武合体派の酒井右京・松平舎人・大山庄太夫らが藩政改革を計画し対立した為、丁卯の大獄と呼ばれる藩論統一の断罪を行った。

**酒井忠篤**（ただすみ）（1853-1914） 1 3代・1 5代藩主

忠発の4男。家督を継ぐはずであった兄・忠怒（ただひろ）がいたが20歳で死去しており、家督は忠発の弟忠寛が継ぐが、忠寛も翌年死去。結果、忠篤が10才で家督を継ぐ事となる。戊辰戦争当時は15歳で若かった事もあり、終戦時の降伏に関しては11代藩主・忠発の意見が最終判断となる。戦後は西郷隆盛の教えを請う為に鹿児島に赴いている。

（右写真：酒井忠篤（明治4年撮影））



**酒井忠宝**（ただみち）（1856-1921） 1 4代藩主

戊辰戦争後の戦後処理により、忠篤が謹慎処分となると、弟の忠宝が家督を継いだ。会津若松・岩城平への転封を、本間家の献金によって回避する。大泉藩知事に廃藩置県まで在任した。明治12年に家督を忠篤に戻している。

**酒井忠良**（ただよし）（1831-1884） 松山藩7代藩主

戊辰戦争時の松山藩藩主で、庄内藩とは密接な関係がある。松山藩兵は庄内藩大隊と連携して各地を戦う。戦後は石高を減らされ、長男の忠匡に家督を譲り隠居。以後松山藩酒井家は東京に住む。

## ■庄内藩 幕末期の家臣たち

**松平甚三郎**（じんざぶろう）（1845-1921）一番大隊隊長

家老。戊辰戦争時は一番大隊隊長として最前線を進んだ。新政府軍と初めて対峙した清川口の戦いの際に指揮を取る。戦後は松平権十郎と共に大泉藩大参事となる。

**酒井吉之丞**（きちのじょう）（1842-1876）二番大隊隊長

先祖は藩主酒井家の家系に繋がり、代々**玄蕃**（げんば）を襲名し酒井家に仕えてきた。戊辰戦争前、公武合体派の祖父・酒井右京は藩内で工作を行った事によって切腹となっている。家督を継いだのちは戊辰戦争に出陣、連戦連勝のめざましい活躍により政府軍から「鬼玄蕃」と呼ばれる。戊辰戦争当時26歳。戦後は明治政府の下で動くが、肺疾患で若くして亡くなっている。

（右写真：酒井吉之丞（明治期撮影））



**酒井兵部**（ひょうぶ）（生没年不詳）三番大隊隊長

文久元年に中老となり、戊辰戦争時には大網口の警備にあたる。うるう4月の天童城焼き討ちの実行役であるが、藩はこれを良しとしなかったため、戦後300石を減らされている。

**松平権十郎**（ごんじゅうろう）（1838-1914）四番大隊隊長

新徴組御用掛・庄内藩家老。江戸市中取締の指揮も行った。本名は松平親懐（ちかひろ）。庄内藩の軍事係・総帥として活躍。戦後は松ヶ岡開墾の指導にも当たった。

**水野藤弥**（とうや）（1839-1879）四番大隊隊長（7月～）

中老。松平権十郎の後を引き継ぎ、四番大隊隊長として秋田雄物川まで進軍するも、降伏の為帰還。藩の正使として官軍参謀・黒田清隆に会見している。

**石原倉右衛門**（くらえもん）（?～1868）五番大隊隊長

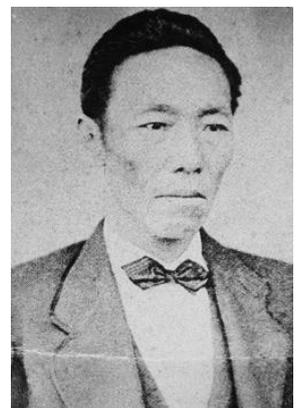
中老。戊辰戦争開戦のきっかけとなった薩摩藩邸焼討を幕府の密命を受け実行した。吹浦口へ出陣し、6月に新潟で開かれた奥羽諸藩の会議の帰りに官軍に討たれ死亡する。

戦後処理で叛逆首謀人届出をする際、やむを得ず指名された。家名断絶となるが、弟が酒井の姓を与えられて再建されている

**菅実秀**（すげさねひで）（1830-1903）

酒井家に仕える側近であり、松平権十郎と共に江戸市中取締を任じられた。小梅猟場密猟事件を起こし帰郷。藩主の信頼が厚く、戊辰戦争開戦後は軍事係となり藩の指導をし、戦後処理も行った。西郷隆盛に教えを受け『南州翁遺訓』をまとめる。幕末から明治期の庄内の政治・産業に大きな影響を与える。

（右写真：菅実秀（明治期撮影））



## 松森胤保（たねやす）（1825-1892）

戊辰戦争時は松山藩軍務総裁兼庄内藩参謀として活躍。薩摩藩邸焼き討ちの際は現場で指揮を取った。戦後は指導に当たりながら趣味をたしなみ、科学・歴史・考古などを研究し著作多数、活動範囲が多岐にわたる人物として有名。『北征記事』は松森胤保が記したものである。

## ■本間家

### 本間光美（こうび）（1836-1913）大地主

本間家6代目。戊辰戦争の際は庄内藩へ10万両の軍資金援助を行い、戦後の庄内藩主転封阻止の為に更に5万両を献金する。武器商人との武器調達交渉も行い、庄内藩の近代装備充実は本間家の援助が大きい。戦後は本間農場を作り近代農業を実践した。（右写真：本間光美（明治期撮影））



### 本間耕曹（こうそう）（1842-1909）政治家

本間家5代目光暉の弟・光和の息子。光美と同じく武器商人と交渉を行い、庄内藩に最新の武器を供給する。戦後は光美と相続争いをするが和解。警察庁・衆議院議員を経て東京に住む。

## ■奥羽越列藩同盟の結成

会津藩・庄内藩が朝敵とされ、新政府軍は東北の諸藩に「会津・庄内を討て」という命令を下す。しかし、朝廷に逆らう気ははじめから持っていない会津藩と、討伐の理由がはっきりしない庄内藩に対し、東北諸藩は新政府軍の命令にすぐには従わず、進展しない状態が続いていた。その後、仙台藩・米沢藩が先頭に立ち、会津・庄内救済の為に新政府軍に訴えを起こす同盟を作り上げる。これが奥羽越列藩同盟であり、その後、長岡藩をはじめとする越後の諸藩を加え「奥羽越列藩同盟」が完成する。

しかし戦争が進むと、諸藩の離脱・裏切りが多く発生した。庄内藩に隣接する新庄藩・秋田藩も、同盟に参加していながら新政府軍に加担することになった。結局同盟はまとまりに欠き、終局にむかうにつれ瓦解してゆく事になる。

奥羽越列藩同盟に加盟した藩			
八戸藩	福島藩		【離反した藩】
南部藩	泉藩	【越後六藩】	松前藩
一ノ関藩	下手渡藩	長岡藩	弘前藩
仙台藩	亀田藩	新発田藩	秋田藩
二本松藩	矢島藩	村上藩	本荘藩
棚倉藩	米沢藩	村松藩	三春藩
相馬中村藩	山形藩	三日市藩	守山藩
平藩	上ノ山藩	黒川藩	新庄藩
湯長谷藩	天童藩		※自ら離反した藩のみ

※この同盟は「庄内藩と会津藩の救済」が目的の為、庄内藩・会津藩は加盟していない。

## ■戦時中の酒田

国をあげての総力戦になった戊辰戦争には、多くの町民・農民が戦闘に加わった。新政府軍の進軍が進むと酒田町も警戒態勢に入り、暮らし・貿易を監視される事になった。4月18日に行われる予定だった酒田山王祭は中止となり、内輪だけの祝い事となっている。4月19日に亀ヶ崎城代が町奉行所に出した触れ書きは、貿易の町である酒田らしく、来航する船に警戒するものが多い。

- 1：旅人はただちに酒田から出発させる事
- 2：怪しいものはただちに召し取る事
- 3：船で酒田を訪れた船頭・水主（船乗り）も陸へ上げてはいけない。入港する船は停泊させてはいけない。もし停泊の必要がある場合は手続きが必要である。
- 4：難破船・物資不足の船は用件が済むまで停泊させる事
- 5：注文品の陸揚げは、沖に船を泊めて受け取る事
- 6：商い場（陸揚げ品保管場）の囲いの外に、船頭・水主を出してはいけない（4/29通達）

触れ書きを出すだけでなく、海からの攻撃に備える為に、高野浜・大浜・能登興屋の見張りも連日続いた。8月には実際に新政府軍の軍艦が鼠ヶ関へ砲撃を行っている。

## ■町兵の組織

武器訓練を行い防備に勤めてきた酒田町だったが、戦いが終盤に向かう慶応4年8月11日、ついに酒田町兵が組織される。

一番隊から六番隊が銃隊で、七番隊が大工町出身者による工兵隊である。小隊司令（隊長）は亀ヶ崎家中の藩士が担当したが、副隊長にあたる半隊司令は酒田三十六人衆に任せられた。これは酒田に残る伝統を重んじたものである。なお、**黄金隊**と呼ばれる五番隊は豪商らで組織されており、武器を自費で購入している。

出兵時は太鼓を打ち鳴らし、行進し進む彼らを酒田町人らが見送ったという。

一番隊	二番隊	三番隊	四番隊	五番隊	六番隊	七番隊
49名 広木安右衛門 椿台	50名 村岡金吉 関川	50名 牧角之進 関川	52名 斎木源四郎 関川	56名 本間数右衛門 関川 (黄金隊)	49名 石原友太夫 記録無し	54名 下妻孫兵衛 関川 (工兵隊)

(簡略版町兵編成表：人数・小隊司令・進軍地・特色)

## ■農民による編成

大砲組	農兵隊	その他
一番分隊（25名） 二番分隊（26名） 三番分隊（27名）	農兵一番隊（44名） 農兵二番隊（56名） 農兵三番隊（56名） 農兵四番隊（58名）	青沢組（52名） 山楯組（34名） 升川組（40名） 広野村（不明） 古川組（47名）
鵜渡川原と新田目の農民による 大砲・小銃の隊 朝岡主殿（ともの）隊という	一番隊は鵜渡川原の農民 他隊は新田目組の農民	鵜渡川原と新田目以外の農民

## ■町民・農民の負担

酒田の町民・農民には、徴兵に加えて金銭面でも負担がのしかかった。ただでさえ船の入港や旅人への制限で売り上げが落ちていた時で、酒田の賑わいも落ち込んでいた為に、相当な負担となった事と思われる。

町民・商人の負担	農民の負担
<ul style="list-style-type: none"> <li>●金銭の上納・軍資金提供</li> <li>●非常の際は消防を担当する事</li> <li>●町医者も戦地へ動員された</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●郷夫として徴発される</li> <li>●村の通りには篝火を焚き、番屋を建てる事が命じられる</li> <li>●藁・肥料も物資として提供</li> </ul>

（参考：酒田市史）



物資輸送の為に、7月16日から8月10日までの約1ヶ月の短期間中、7851人が人足として借り出されている。これらの負担が戦時中の酒田町・各村に重くのしかかり、戦後は物価高騰・米の凶作もあり、民衆は困窮した。

←松山藩弾薬箱（資料館蔵） 農兵が背負い戦地へ運んだ

## 豆知識 ■武器商人スネル兄弟

なぜ庄内藩兵は最新式の武器を装備する事が出来たのか。それは本間家が武器商人と呼ばれる人物と取引をしたからである。慶応年間の本間家文書には度々「スネル」という外国人の名前が登場しており、武器・弾丸を買い付けている。

「スネル」は兄ヘンリー・スネル、弟エドワード・スネルのオランダ人兄弟であり、長岡藩や会津藩などの旧幕府軍側に武器供給を行った有名な武器商人である。素性に謎が多いが、彼らは会津軍の軍事顧問も兼ね、松平容保から信頼されていたという。江戸赤羽に住んでいた事からアカハネ・スネルとも呼ばれた。また、ガルトネル・スネルとも呼ばれる。

## ■主な戦場

庄内藩の進撃ルートは以下に分けられ、そのルート上で新政府軍との戦闘が勃発している。

- 山形新庄ルート（天童～新庄）→秋田内陸ルートへ続く
- 秋田内陸ルート（矢島～横手～大曲～花館～椿台）
- 秋田沿岸ルート（三崎山～亀田～椿台）
- 関川防衛ルート（関川）

追記：庄内藩の本隊は「大隊」と呼ばれ、一番大隊～四番大隊まで存在した。一番・二番が山形・秋田内陸ルートを進み、三番・四番が秋田沿岸ルートを進んだ。松山藩隊や町兵・農兵はその大隊を補佐・援助する役割を持っていた。

このうち酒田の町兵・農兵が組織的に出兵したのが、**秋田戦争**と呼ばれる秋田内陸・沿岸の戦いと、関川口防衛戦である。どちらも戦争の最終局面に近い時期に起きた戦いで、激戦となっている。被害も甚大で、酒田町兵・農兵からも多く犠牲者が出た。

※これより下ページ、戦いの絵図は「北征記事」（松森胤保著／光丘文庫蔵）より転載

## ■清川口の戦い

清川口は、新庄藩領へと繋がる重要な場所で、庄内藩と政府軍が初めて戦った戦場である。

新政府軍は会津討伐のために3月より東北へ進軍を開始していた。薩摩藩邸焼き討ちを実行した庄内藩も、自藩も攻撃を受ける危険を察知し、庄内領への入り口である清川口・大網口・吹浦口の防備を進めていた。

最上川を下り庄内領へ攻め込もうとする薩長兵・新庄兵の新政府軍は、新庄と庄内の境目である清川口にひそかに陣取る。しかし、偶然農婦が動く影を見つけ報告、清川本営は太鼓を鳴らし、松平甚三郎率いる庄内藩兵181名が防備に当たった。4月24日早朝に新政府軍が発砲。銃撃戦が始まり庄内藩は防戦に努める。その後、狩川の農夫達が応援に駆けつけて声を張り、庄内本隊の援軍が来たと思わせた事で、新政府軍が退却したとある。

この戦いは薩摩藩兵撤退による庄内藩の勝利に終わり、モルチール砲（中型の大砲）やミニケール銃、弾丸等が戦利品として記録されている。

結果：新政府軍撤退により、庄内藩の勝利

## ■大網・天童の戦い

清川口の戦いの後、敵を牽制するべく三番大隊の酒井兵部の一行が大網口から村山方面へと進む。途中酒井吉之丞率いる二番大隊も合流した。天童藩は清川口へ新政府軍を案内したとされる。

大網口は戦争開始当初から、内陸からの庄内領への入り口（六十里越街道に通じる）である為に守備されてきた。うるう4月3日に谷地・寒河江に陣を決めると、天童藩兵らが攻撃を仕掛けてきた。他国への進撃は藩より禁じられていたが、吉之丞ら進撃派に押し切られる形で進軍を決めた。天童城前の最上川沿いには天童兵らが配備されていたが、庄内軍は二番大隊・三番大隊に分かれて進軍し突破、防備が手薄だった天童城を占領し、城下は焼かれた。

庄内軍は即日天童から兵を引いているが、天童焼き討ちの報告を聞いた庄内藩は「我々から他領に攻め込む事をしてはいけない。即刻兵を引き、この旨を徹底させる事」と厳しい通達を送っている。これを受け、庄内軍は六十里越街道の国境まで下がる。

この天童攻めの戦いは酒井兵部が主導したが、前述の通り、庄内藩は他領に攻めこむ事を良しとしておらず、戊辰戦争後に酒井兵部を減石処分している。

結果：庄内藩勝利 天童藩主・織田信学は仙台へ逃れる

## ■新庄の戦い



新庄藩はもともと奥羽越列藩同盟に属していたが、藩内の意見は纏まっておらず、その混乱の中で進軍してきた新政府軍に加担し、同盟を離反する事となった。

その頃、新政府軍の攻撃を受ける激戦地・白河方面へ一番大隊(当時上ノ山に進軍)・二番大隊(当時楯岡に進軍)は向っていたが、新庄と秋田の異変の知らせを受けた為に進軍を中止し、新庄城を攻め、秋田領へ向かう事となった。

一番大隊・二番大隊は13日午前、舟形で待ち伏せしていた新庄軍と対戦した。これを突破して新庄城下へと進む。新庄藩兵と新政府軍が新庄城正面を守備しており、正面から進んだ一番大隊は襲撃を受け混乱し退却した。しかし、14日に二番大隊が城側面より奇襲を仕掛け、激戦の末に新庄城は開城となった。この際に新庄城下は燃え、遠く庄内からも黒煙が見えたという。この日は盆の最中であったため、新庄の町は混乱を極めた。なお、新庄藩主・戸沢正実<sup>まさざね</sup>は、藩士・使用人らと共に秋田へ逃げ、その後の秋田領での戦闘でも新庄軍は参戦している。庄内藩は討死9名・負傷者33名を出す激戦であった。

結果：庄内藩勝利 新庄城開城・新庄軍は秋田へ

## ■農兵の見間違え

亀ヶ崎足軽目付御用帳に記録が残っている。新庄の戦いの勝利報告に来た船が、夜中に最上川を下り庄内に現れるが…

「古口・早船、酒井吉之允様御手内・新庄落城町中焼打二相成、新庄人数金山・引取申候、官賊共全秋田に逃去候由、右早御注進之直話也、御注進船を敵船と見違(夜中故)清川農兵発砲いたし大騒之由、乍去早速味方大御勝利之事相知恐悦之趣二御座候……………」

古口に早船が来て、酒井吉之丞らの手によって新庄城は落城し、町は焼かれ、新庄の民は金山に逃げ、新政府軍はすべて秋田に逃げていったと伝えた。これを伝えに来た船を、夜中であったために清川の農兵が敵の船と見間違えて発砲し、大騒ぎになった。しかし新庄落城が分かると勝利に喜んだ……………」

戦闘に不慣れなためか、農兵が見間違えて味方の船に発砲している事が分かる。

## 豆知識■世良の密書

奥羽鎮撫総督府下参謀である、長州藩士・世良修蔵暗殺のきっかけとなった密書が本間家に残されている。世良はこの密書を大山格之助に送ろうとしたが、これが仙台藩士に見つかったために、福島の金沢屋という宿で惨殺された。世良はあくまでも武力により会津・庄内を打ち倒す狙いがあり、会津救済の為に動く仙台藩の障害となっていた。現在この密書は公開されていないが、『方寸 第一号』にその全文が掲載されている。

※この密書が書かれる前に、仙台藩と米沢藩が、奥羽鎮撫軍・九条総督へ8時間に渡る交渉の末に、会津藩降伏嘆願書を手渡している。これは仙台藩と米沢藩が自らの兵力を武器に、強引に渡したものである。

……右の訳にては総督府兵とてハ壺人も無之、押切而返せハ今日より両藩会へ合し候相成り可申、少々にては兵隊有之候ハ、出来申候得共、も之數字津宮兵も追々賊之蜂起にて今に相成り大込り申候、乍併直総督取上げに相成候を又候返す訳にも参り不申候間、此上一応京師へ相伺奥羽之情実篤と申入、**奥羽を皆敵と見て進撃之大策ニ致シ度候に付……**（中略）……右大挙に相成候時ハ、扨底の軍艦にては坂田沖へ一、二艘廻し人数も相廻し、前後挟撃之手段ニ致外致方無之、越後口へも近況申遣べく、尤庄内口は急々可討入様可被致候……

（現代語訳）

……右の通りで、総督府兵が一人もおらず、むりやり受け取らせられた会津藩降伏の嘆願書を押し戻せば、仙台藩・米沢藩は会津藩と同調するでしょう。兵が少しでもいれば出来ました。宇都宮のほうでも敵が蜂起してきており、こちらに援軍が来ず困っております。一度受け取った嘆願書を返すわけにもいかず、こうなったら一度京都へ戻り奥羽の現状を報告し、**奥羽すべてを敵とみなし進撃する作戦**を取りたいと思っています……（中略）……右の通り、大軍で攻め込む事になった場合は、少ない軍艦でも一、二隻酒田沖に送り、更に兵も送り、前後から挟み撃ちする手段を取る他無いと思います。越後口へもこの状況を報告し、当然ながら庄内藩へは早く進撃することをおすすめします……

仙台藩・米沢藩の降伏嘆願書には対応せず、それどころか東北諸藩すべてを敵とみなすとしている。これに激高した仙台藩が世良を暗殺し、奥羽越列藩同盟が新政府軍に対立する事となる。なお、同じ内容の「世良の密書」は数点存在しており、仙台側が正当性を持たせる為に内容を修正したという説もある。

（参考：方寸 第一号）

## ■三崎海岸線の戦い

新庄藩同様、藩論をまとめる事が出来ていなかった秋田藩は、新政府軍の九条道考奥羽鎮撫総督、沢為量副総督らが藩内に入った事で圧力が掛かり、結果勤王派が主権を握る事となる。7月4日には秋田を訪れていた仙台藩・盛岡藩の使者7名を殺害し、秋田藩は東北における新政府軍の拠点と化した。

7月16日、早朝から秋田軍1500名が鳥海山観音森を抜けて、三崎峠東から庄内三番大隊に攻め込んできた。秋田軍は女鹿村・滝ノ浦村に火を放ち、勢いをつけて進軍した。この村の火を見た酒田町では亀ヶ崎青原寺の鐘を打ち鳴らし、海岸線を防備していた兵に加えて町兵・農兵も派遣している。女鹿付近にいた秋田軍は続々と加勢してきた庄内軍に挟まれ、三崎山に逃げた後、撤退していった。

苦戦となったが庄内藩の勝利に終わり、20日には藩主忠篤が直接兵士達の激励に女鹿を訪れている。その後蕨岡で軍議を開き、新庄方面の一番大隊と二番大隊の支援、三番大隊の支援などを協議した結果、新たに四番大隊が編成される事となった。この四番大隊には、新徴組に加えて町兵・農兵らが組み込まれており、以降三番大隊・四番大隊に従って進軍する事となる。

結果：庄内藩勝利 国境防衛成功

## ■矢島の戦い

新たに編成された水野藤弥率いる四番大隊は、秋田沿岸部の秋田勢に対抗し進軍する事になった。矢島藩も奥羽越列藩同盟に加盟していたが、秋田藩同様藩論は「勤王」に統一し、新政府軍に加担していた。この為、庄内藩の討伐の対象となる。

上寺～鍋倉～矢島ルートを進む一手、鳥海山～矢島ルートを進む一手の2つに隊を分け、矢島へと進軍することとなる。攻め込む前日の27日は小雨が降り、兵たちは凍えた(旧暦の為に気候は秋に近い)という。鳥海山～矢島ルートには新徴組が加えられ、鳥海山山頂より一気に駆け下りて攻める、義経のひよどり越え作戦に似た奇襲法を取った。28日夕方に鳥海山越えルートの一手が矢島に攻め入り、29日正午には鍋倉回りルートの水野藤弥の一手も到着した。この四番大隊の奇襲によって、矢島藩主・生駒親敬は陣屋を捨てて秋田へと脱出し、矢島の民家・寺院は炎に飲まれた。

矢島戦の後に庄内藩兵は本荘藩へ乗り込んだが、既に城は焼け落ち、藩主・六郷政鑑は秋田へ逃げていた。その後、庄内藩矢島本営に亀田藩の使者が訪れて降伏を申し入れた為、亀田城は無血開城となっている。亀田藩藩主・岩城隆邦は致道館に護送され、女性と子供は庄内へと避難した。

結果：庄内藩勝利 亀田藩が庄内藩へ加勢

## ■湯沢の戦い

三番大隊・四番大隊が沿岸部から秋田藩領へ向かうのに対し、内陸の最上地方から秋田藩領へ向かう一番大隊・二番大隊は、中村(現在の真室川)付近より山越えをする事となった。秋田へ向かう道は5種類あったが、秋田領院内に入る前の雄勝峠の本道では、大木により本道が塞がれた上に秋田・新庄を含む新政府軍の射撃があり、国境越えの戦いで庄内藩は討死9名、負傷者21名を出している。一番大隊・二番大隊はそれぞれ雄勝峠の本道を避けて突破し、犠牲を出しながらも秋田領に入った。庄内軍は8月2日に院内に入り、8月5日には湯沢を占拠した。院内城・湯沢城は共に秋田藩の支城であり、秋田藩佐竹氏の家臣が守っていたが、院内城はすでに放棄され火をつけられていた。

結果：庄内藩勝利

## ■横手の戦い



院内・湯沢を突破した庄内軍は、8月11日早朝に秋田藩支城・横手城へ進撃する。一番大隊・二番大隊が二手に分かれて城を攻める事になった。この時横手城は佐竹氏の重臣戸村十太夫の息子・戸村大学（当時19歳）が守り、兵280名と籠城していた。

一番大隊が松山藩兵と共に本道から横手城正面へ、そして二番大隊が城の側面<sup>からめて</sup>搦手口へ、更に仙台藩兵が城裏側へ回りこんだ。午後2時ごろより各隊が進撃を開始すると、横手城からは槍・刀を持った兵が応戦してきた。しかし横手城の櫓にも火が点き、強風にあおられて城下まで延焼し、夜の雨で鎮火するまで燃え続けた。戸村大学は裏門より脱出し寺に退き、その後庄内藩兵らは横手城へ入城する。

結果：庄内藩勝利

### 豆知識■庄内様

戦いが終わって一晩経った12日、城下には討死した兵達の遺体が、敵・味方問わず道端に放置されていた。一番大隊隊長・松平甚三郎と、二番大隊隊長・酒井吉之丞がそれを哀れに思い、宿泊先の染屋の主人に「供養にかかる費用はこちらが払うから、疑わずに速やかに準備する様に」と話し供養を行う事となった。それまで警戒心を持って二人に接してきた染屋の主人は、人が変わった様に應對し、「庄内様が葬って下さる、敵兵に対しここまでしてくれるとは思ってもいなかった」と言ったという。

松平・酒井が秋田龍昌院に建てた墓標（現存しない）には「佐竹家名臣戸村氏忠士之墓」と刻まれ、裏面には「奥羽の義軍葬埋<sup>れいはい</sup>禮拜感泣して退く此人々の姓名を辨<sup>べん</sup>ぜず若<sup>もしくは</sup>これを知る者あらば幸に追記せんことを希ふのみ…」と書かれていた。孤軍奮闘した戸村大学と、忠義を尽くした家臣21名への賞賛を込めた供養だった。この染屋の主人は感謝し、きのこ等を一年間送り続けたという。

（参考：方寸 第九号）

## ■角間川の戦い

8月13日より、横手を突破した一番大隊・二番大隊は大曲へと向う。一番大隊は同行していた仙台藩兵を先鋒に、六郷村を過ぎて大曲に向ったが、途中秋田・新庄・佐賀藩兵と戦闘が起きる。仙台藩兵は混乱し敗走しかけるが、一番大隊が迂回し敵を破っている。

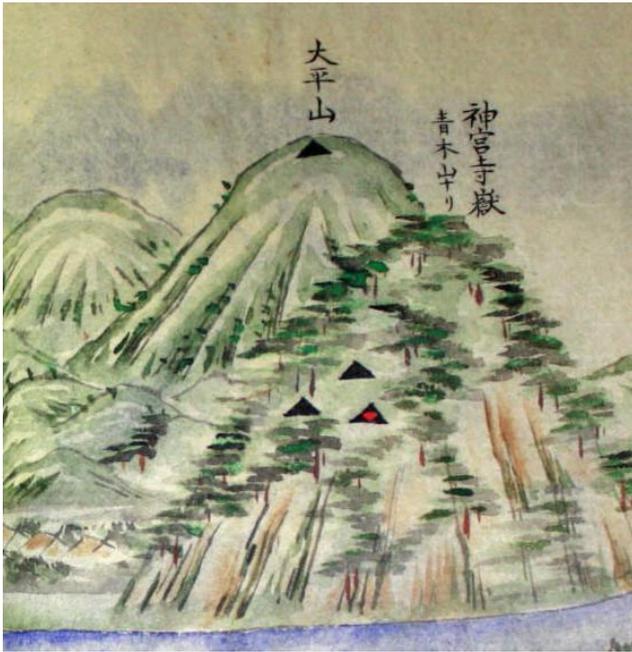
また、二番大隊は角間川を挟んで秋田・新庄・長州・小倉の藩兵と対峙し、これを打ち破ったため新政府軍は敗走、庄内藩は17日に大曲を占領した。この時敗走した新政府軍は、神宮寺へと引き下がっており、この神宮寺の攻略が以後長期化する事となる。

一番大隊に所属していた酒田の儒学者・阿部千<sup>ち</sup>萬<sup>ま</sup>太<sup>た</sup>は探索方として参戦していたが、新政府軍により捕縛され、桂太郎の尋問を受けた後、斬殺されており、今も大曲に墓がある。

この頃から新政府軍には九州方面からの援軍が到着する。庄内藩との最終戦に向け、新政府軍の兵力・装備は増強されてゆく。

結果：庄内藩勝利

## ■花館の戦い



大曲に本陣を置いた一番大隊は、神宮寺へ敗走した新政府軍を追い、22日早朝から攻撃を開始した。しかし苦戦し突破出来ず、一時撤退を余儀なくされた。激戦のために、砲撃が降り注ぎ、犠牲も多く出た。新政府軍は着々と勢力を強めており、23日より反撃を開始。一番大隊の本陣がある大曲へも薩摩藩兵が攻撃を仕掛けてきた。しかし、庄内兵はこれを撃退し、花館へと追いやる事に成功している。

敵陣のある花館攻略の為に松平ら隊長級で軍議を開き、闇夜に乗じて攻め入る事となり、突破している。

結果：庄内藩勝利

## ■椿台の戦い

椿台の戦いは、一連の秋田戦争の決戦地とされている。慶応4年3月より秋田藩の支城を椿台に作っていたが（終戦後の明治3年には廃城）その築城途中での開戦だった。ここが秋田藩の最終防衛線となり、総力を挙げて防衛に努めた。新政府軍の援軍も続々と到着していた為に、もっとも激しい戦いが行われた。戦闘前の9月6日には、酒田町兵・農兵らが太鼓を鳴らしながら戦線へと出発し、9日には到着、雄物川の戦いへと加わる。雄物川は椿台・刈和野・神宮寺にまたがり流れている川で、この川に沿って藩兵・町兵らが並んだという。



神宮寺を強固に守備する新政府軍に庄内軍

は苦戦した。敵陣のある神宮寺嶽との間に流れる玉川を渡る作戦を計画したがうまくいかず、8月半ばに新政府軍が神宮寺に陣を置いてからの攻略は、結局約1ヶ月の長期戦となっている。

11日、二番大隊が神宮寺より先に刈和野を攻略した。次の日に一番大隊が刈和野へ進軍し、13日には神宮寺嶽を敵陣の背後より襲撃している。

庄内藩兵は久保田城まであと数キロという椿台へと進軍する。しかし、秋田藩は久保田城・城下をなんとかして守備するため、ここで庄内軍を食い止めるべく徹底防戦の構えに入っていた。応援によって兵力・装備とも充実させていった秋田藩・新政府軍にかなわず、庄内藩の討死は43名にも上った。椿台の戦いでは、酒田の町兵・農兵も14名討死し、負傷者は24名出ている。

敵の守りを突破出来ず苦戦が続く中、9月14日に刈和野で行われていた軍議中、仙台藩・米沢藩らの降伏、庄内藩へ降伏を勧める旨を伝える早追いが到着する。上ノ山藩兵へは撤退命令が出され、米沢藩からは降伏を斡旋する書状が届いた。各隊隊長らは「先に仙台藩・米沢藩が降伏してしまえば、奥羽越列藩同盟は瓦解し、新政府軍が庄内へ攻めてくるだろう。庄内藩の大隊がすべて秋田藩領内においては危険である。命令が無くとも速やかに庄内に戻り、国境を枕にして国と存亡を共にしよう」と決定した。

15日、山越えを狙って一番大隊は刈和野から境へ向うが、ここでも新政府軍と激戦となり、討死26名・負傷者17名を出してしまう。16日、鶴ヶ岡城で重臣会議を開いた庄内藩は、旧庄内藩主・酒井忠発の決断によって**降伏を決定**する。被害が膨れ上がりつつあった為に、17日午前3時より庄内軍は撤退を開始、隊ごとにコースを変えて庄内へと戻っていった。

刈和野・椿台の戦いは、戦争開始から連戦連勝であった庄内藩初の大敗で終わった。

結果：庄内藩大敗・撤退 降伏へ

## ■関川の戦い

関川～鼠ヶ関は越後方面からの庄内領入り口であり、清川・大網・吹浦と並び重要な防衛拠点であった。しかし、隣接する越後では**北越戦争**（長岡藩を始めとする越後諸藩对新政府軍）が始まり、7月末には長岡城が陥落、物資輸送拠点である新潟港も占領された。

長岡藩の敗北・同盟軍の離反で孤立する村上藩への支援の為に庄内藩は兵を派遣したが、結局8月11日には村上城も長岡藩同様に落ちてしまう。

新政府軍が越後全域を占領した為、国境である鼠ヶ関・小名部・関川で庄内藩は防衛に努める事となる。しかしこの頃は庄内の本隊が秋田へ出陣していた為、町兵・農兵らも多く出兵した。酒田町一番隊も関川防衛に参加している。しかし、未熟な兵が多かった事が後に被害を大きくする要因になった。

新潟港という重要な輸送ルートを確保した新政府軍は、防衛線を突破するべく続々と兵を送り猛攻撃を仕掛けた。9月11日には関川村が新政府軍によって占領され、以後奪還は出来なかった。関川村は庄内領唯一の占領地となった。9月27日に撤退が行われるまでに、庄内藩はこの国境防衛線で死者62名・負傷者50名という甚大な被害を出し、酒田町一番隊も死者7名・負傷者7名を出した。

結果：庄内藩降伏により敗北

## ■降伏にいたるまで

庄内藩は近代装備を充実させ、当初新政府軍を圧倒し勝利を重ねた数少ない旧幕府側の藩である。しかし、先に降伏した米沢藩からの降伏の斡旋に加え、相次いだ周辺諸藩の降伏により徐々に新政府軍が庄内領に迫り、ついに9月16日に酒井忠発が「**謝罪降伏**」で藩論を一致させた。

秋田などに派遣されていた藩兵らも状況を見て撤退を開始しており、17日には新政府軍へ謝罪交渉に向う3名の藩士（酒井帯刀・武藤半蔵・吉野遊平）を鶴ヶ岡城に呼び出している。米沢藩経由で新政府へ謝罪降伏を願い出る手はずだったが、移動する黒田清隆を追いかけて村山・最上を駆け回っており、非常に難儀だったようである。庄内藩の使者達は降伏謝罪の書を持ち、約一週間を北に南にと走り回った。しかし、ようやく出会う事が出来た黒田は嘆願書を受け取らなかった。これは「兵器の差出」「城の開城」が明確に書かれていなかったからであり、謝罪降伏に対する庄内藩の甘さはここで指摘される事となった。



写真：黒田清隆（国立国会図書館より）

## 黒田清隆に会うまでの道のり

18日：米沢からの使者2名と共に、庄内藩士3名は清川から舟形へ向う。舟形で待ち受けていた米沢藩士・神保乙平に会い、案内を受ける。近々庄内が一気に攻められるらしいという情報も聞く。



19日：天童に到着し、上ノ山へ向う。神保乙平は先に米沢藩世子上杉茂憲（米沢軍先鋒隊長）のもとへ向う。夜12時ごろ、武装した薩摩兵を目撃する。



20日：再度神保乙平と合流。上杉茂憲が長谷堂に居るとの情報からそこへ向うが、立ち去った後だった。次の村の陣所はもぬけの空で、すでに上杉茂憲は海汐（現西川町）へと移っていた。きりが無い為に庄内藩士3名は宿に泊まる事となる。



21日：未明に米沢藩千坂太郎左衛門が、高鍋藩（高鍋藩は上杉鷹山の出身藩）の岩村虎雄という人物を連れて宿を訪ねてくる。岩村に庄内藩の謝罪文を添削してもらい、早速早駕籠に乗って海汐へ向うことになる。一行は薩摩の陣所を抜け、上杉茂憲に会う事が出来た。



22日：新政府軍参謀であり、のちの内閣総理大臣・黒田了助（清隆）が大石田に泊まる事が分かり、吉野遊平一人が米沢藩の使者と共に駕籠で向う事になる。夜12時に着いたが深夜の為会えなかった。



23日：再度面会の交渉をしたが、今度は黒田が清水へ移動してしまった為、後を追いかけてやっと会談の約束を結ぶ。夜8時頃に黒田と吉野の会談が実現するが、謝罪降伏の嘆願書の問題点を指摘し、簡単に書を受け取らなかった。謝罪交渉の条件を改める為、3日の猶予を貰う。



24日：吉野遊平は鶴岡に帰る。その後、25日に庄内藩の家老・四番大隊隊長水野藤弥らが、黒田と古川にて謝罪降伏について会談した。この会談で黒田の裏に居たのが西郷隆盛であり、後の庄内藩士達に影響を与えた。

（参考：方寸 第九号）

古口にて黒田清隆に条件として提示された内容は以下の通りである。

- 1：国境守備隊を即刻引き上げる事
- 2：鶴ヶ岡城と亀ヶ崎城を開城し、藩主は城外へ移動する事
- 3：銃器・刀を一箇所に集める事
- 4：藩主は大総督府からの呼び出しがあった際直ちに参る事
- 5：藩士は自宅謹慎し、銃器はすべて差し出した上で命令を待つ事
- 6：なお、藩の重役の公務出張は差し支えない

これを受けた藩主忠篤は黒田清隆と会見し、禅竜寺へ謹慎した。27日には新政府軍約1000人が城下へと入り、鶴ヶ岡城は開城となった。武器の没収も行われ、西郷隆盛・黒田清隆・大山格之助らは点検を行った。回収した武器は越後新発田の総督府に送られたが、この為庄内の農夫が運搬に徴収されている。

黒田清隆は29日には新発田に出立しているが、それを追いかけるように庄内藩は藩士を派遣して、処分の軽減を求める嘆願書を提出している。朝敵とされた庄内藩ほか旧幕府側の藩主らは東京で謹慎していたが、罪の重さによって新政府が処分を決め、結果庄内藩は5万石減・藩主交代となった。

「朝敵」とされた会津藩・庄内藩は、戦後の処罰に大きな差がある。

庄内藩		会津藩
17万石→12万石 転封回避	減石 転封	28万石→斗南3万石 領地没収
酒井忠篤：謹慎 (明治2年解除) 弟忠宝が家名相続 のちに再度忠篤が相続	藩主	松平容保：謹慎 (明治5年解除) 嫡子容大が家名相続
鶴ヶ岡城開城時に、藩士達が帯刀する事が許された	その他	戊辰戦争の会津藩犠牲者は2500人超

もっとも甚大な被害を受けた会津藩はその処分も重く、当時不毛の荒地であった斗南（現在の青森県むつ市）への転封となっている。しかし、同じく朝敵とされた庄内藩は転封をしていない。これは、本間家からの転封阻止の献金が強く影響している。

のちの内閣総理大臣である大隈重信より「70万両を献金すれば、転封を撤回する」という事を聞いた本間光美は、大金の借用の為に各地を奔走し、明治2年12月に30万両を献金した。その後残りの40万両は献金不要となり、転封は阻止されたのである。もし転封が実行されていれば、岩代国若松（現在の福島県）へ移動となり、領地は秋田藩・新発田藩に分割された。この本間光美の行動は、庄内藩と本間家の強い結びつきによるものである。処分が決まった後も鶴ヶ岡城下も混乱無く落ち着いており、これらの寛大な戦後処理は、西郷隆盛の指導の下と言われている。

### 豆知識■三烈士とは

庄内藩出身の幕臣・佐藤桃太郎と、関口有之助（三河藩士）、天野豊次郎（出身地不明）を称して呼ぶ。彼らは榎本武揚の軍に参加し、江戸やその近辺で新政府軍と交戦したが敗北し、佐藤・関口・天野を含む旧幕臣は庄内へと逃げた。しかし、すでに庄内藩は降伏しており、更に佐藤桃太郎は病気に倒れたという。一時鶴岡の林高院に匿われていたが、進駐していた官軍に見つかり、酒田民政局長の西岡周碩によって取調べを受け幽閉された。この時西岡に庄内藩の正当性を説いた事から、明治2年4月に酒田今町の刑場で斬首となった。佐藤桃太郎は22歳（一説には19歳）という若さであったという。なお、佐藤らに同行していた他5名は、説得に応じて東京へ戻っている。



これを哀れに思った村人が、夜ひそかに埋められていた首を掘り起こして林高院に葬った。胴体は妙法寺に埋葬され、碑が建てられている。

写真：三烈士辞世色紙（林昌寺蔵）

## ■西郷隆盛と庄内



庄内藩の戦後処理は、西郷隆盛の指示の元で穏便かつ寛大に行われた。これは新政府軍と激戦を繰り広げた庄内兵に敬意を示したものだという。西郷は庄内の戦後処理に表立って現れる事は無かったが、のちに中老菅実秀が黒田清隆に礼を言くと、西郷が裏で指示をしていた事が分かるのである。これに感動した藩主酒井忠篤や庄内藩士らは西郷を師と仰ぎ、遠く鹿児島まで教えを請いに行く関係となった。酒井忠篤・忠宝がドイツへ留学するのも西郷の助言からである。

戊辰戦争後、西郷と明治政府との間には征韓論（武力で朝鮮を開国させる計画）により亀裂が入り関係は悪化する。さらには廃刀令・徴兵令の施行によって反発する士族の反乱が相次ぎ、当時鹿児島に集結していた士族の若者の尊敬を集めていた西郷は、反乱する士族の指導者に抜擢される。これが日本最後の内戦である**西南戦争**であり、最後の場となった。

死後の西郷は官位を剥奪され賊とされたが、明治22年の大日本帝国憲法の発令に伴いその汚名が解かれると、翌年には菅実秀ら庄内藩の有志らによって、教えをまとめた『**南州翁遺訓**』が発行される。近年では南州神社も建設されており、現在も庄内には西郷隆盛への尊敬の念が根付いている。

写真：西郷隆盛（国立国会図書館より）

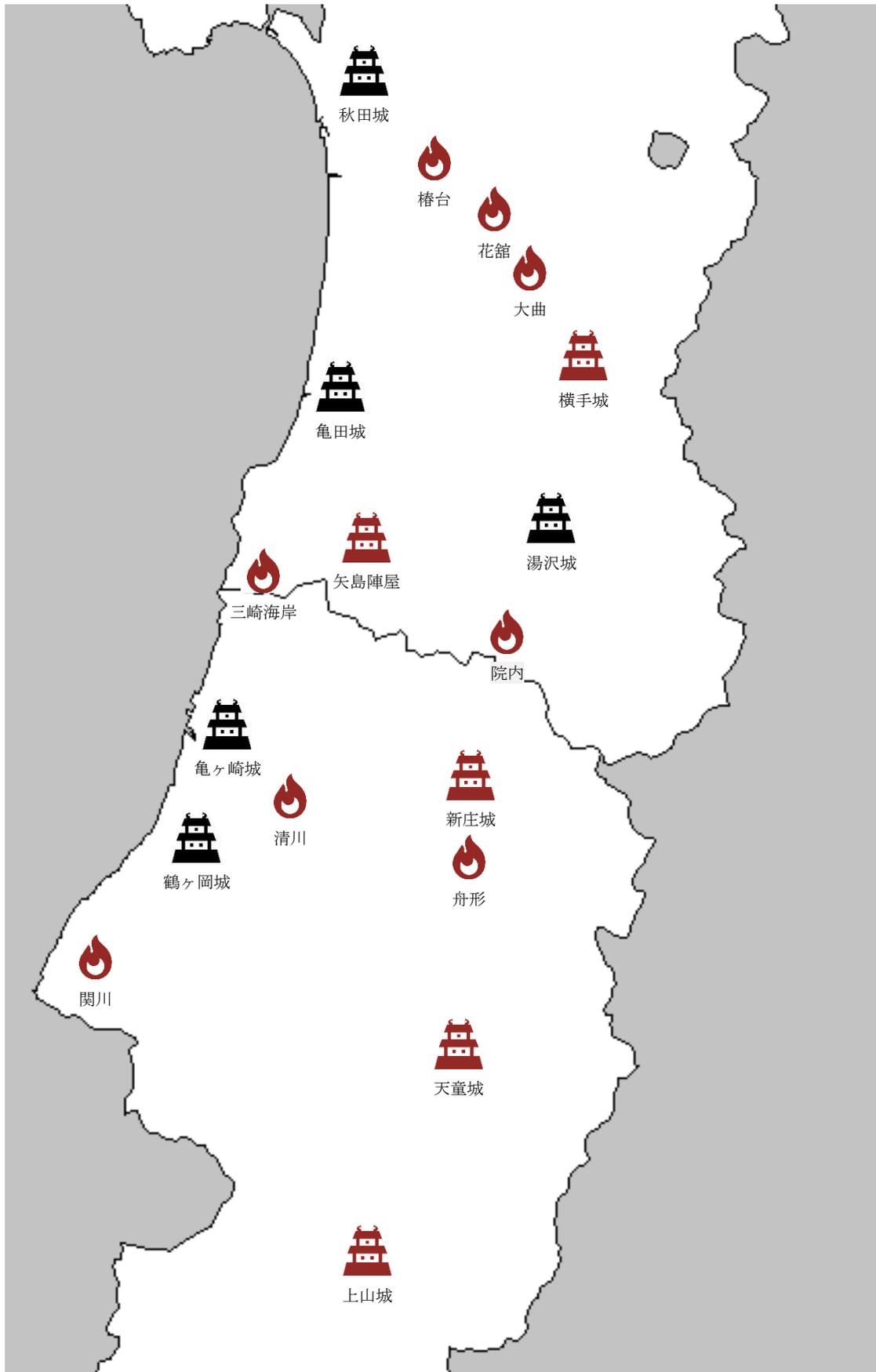
幕末～明治維新期の日本国内の動き

1853年	嘉永6年	ペリー艦隊（黒船）が浦賀に来航する
1854年	安政元年	ペリー再来航、日米和親条約締結
1858年	安政5年	井伊直弼が大老に就任する
		日米修好通商条約締結
1860年	万延元年	桜田門外の変 井伊直弼暗殺
		孝明天皇の妹・和宮が家茂へ降嫁
1862年	文久2年	坂下門外の変 老中安藤信正負傷
		寺田屋事件（薩摩藩尊攘派の粛清）
		生麦事件
1863年	文久3年	薩英戦争勃発
1864年	元治元年	池田屋事件（新撰組が尊攘派の志士を襲撃）
		禁門の変（長州藩が御所を襲撃する）
		第一次長州征伐
1866年	慶応2年	薩長同盟が成立
		寺田屋事件（坂本竜馬暗殺）
		第二次長州征伐 幕府軍敗北
		徳川慶喜が15代将軍に就任する
1867年	慶応3年	大政奉還を発表する
		王政復古の大号令 慶喜に辞官納地を命じる
		庄内藩が薩摩藩邸を焼き討ちする
1868年	慶応4年・明治元年	鳥羽・伏見の戦い 戊辰戦争開戦
		五箇条の御誓文交付
		江戸城無血開城
		奥羽越列藩同盟の成立
		庄内藩降伏
1869年	明治2年	五稜郭に立てこもっていた榎本武揚が降伏
		戊辰戦争終結
1871年	明治4年	廃藩置県
1873年	明治6年	徴兵令の交付 地租改正
		西郷隆盛と新政府が対立
1876年	明治9年	廃刀令 士族の反乱が相次ぐ
1877年	明治10年	西南戦争 西郷隆盛自決
1878年	明治11年	大久保利通暗殺

戊辰戦争時の庄内藩の動き ※すべて旧暦表示

慶応3年12月25日	薩摩藩邸焼き討ち
慶応4年1月3日-4日	鳥羽伏見の戦い勃発 戊辰戦争開戦
2月8日	庄内藩が江戸取締の貢献から、寒河江・柴橋の幕領7万4千石余を預かる
3月28日	新政府軍より庄内討伐の命令が出る
4月2日	鎮撫軍が天童到着 庄内藩兵が寒河江から撤退
4月6日	奥羽鎮撫総督府が秋田藩に庄内討伐命令
4月19日	清川口・大網口・吹浦口に藩兵を派遣 防御体制に入る
4月24日	清川口の戦い 庄内藩勝利
うるう4月4日	大網口の戦い 庄内藩勝利 天童城下焼失
うるう4月11日	白石会議が始まる
うるう4月18日	秋田軍が三崎峠に迫る
うるう4月20日	総督府参謀・世良修蔵が暗殺される これにより政府軍と奥羽諸藩が対立
うるう4月24日	秋田兵・庄内兵に各藩より休戦命令
5月6日	奥羽越列藩同盟の結成
5月11日	長岡藩支援の為、庄内藩兵が出兵
7月4日	秋田藩兵が仙台藩の使者を殺害
7月14日	新庄の戦い 庄内藩勝利 新庄城焼き討ち
7月16日	三崎海岸線の戦い 庄内藩勝利
8月5日	湯沢の戦い 庄内藩勝利
8月11日	横手城陥落 庄内藩勝利 この日鼠ヶ関が政府軍の軍艦に砲撃され、応戦する 酒田町兵が組織される
8月13日	角間川の戦い この頃より政府軍側の反撃が激化する
8月19日	榎本武揚が軍艦を率いて江戸を脱出 この軍艦の中の「長崎丸」「千代田丸」が庄内へ向う
8月23日	花館（大曲）の戦い 庄内藩が大曲を占拠
8月26日	関川口の戦い 以後、関川口近辺では庄内藩兵に多数の死傷者が出る
明治元年9月8日	明治に改元（法的には1月1日からの適用）
9月11日	樺台の戦い 庄内藩敗北
9月16日	旧庄内藩主・酒井忠発が降伏を決定する
9月17日	庄内藩兵撤退開始
9月22日	会津藩落城
9月23日	庄内藩の降伏嘆願書を征討軍参謀黒田清隆へ提出 庄内藩降伏
10月23日	長崎丸二番が飛島沖で沈没
明治2年5月8日	北海道函館・五稜郭落城 戊辰戦争終結

当ミニ図録にて解説している主要戦場・城地図



おおよその位置でアイコンを配置。また、上記以外にも、多くの戦いが発生している。庄内の大隊が秋田城に向かってゆくルート上では、沿岸側・内陸側ともに頻繁に戦闘が起きている。